

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：23301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00172

研究課題名(和文) 近世ヨーロッパ美術における入浴 - 象徴・行為・場

研究課題名(英文) Bath and Bathing in the Early Modern European Art

研究代表者

保井 亜弓 (YASUI, AYUMI)

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・教授

研究者番号：30275086

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、水の持つ象徴的意義を考慮しつつ、日常的な行為から通過儀礼としての儀式的な入浴までを注目し、特に美術に表された入浴図を図像的に分析した。まず、ヨーロッパの風呂の歴史を概観し、その上でキリスト教におけるキリストの血、聖血に注目して、聖血を浴びる表象の分析を行った。さらに美術の主題としてよく知られる、キ古代神話の「ディアナ」の物語と、キリスト教の「スザンナの水浴」「バトシェバとダヴィデ」の物語を分析した。

成果としては、とくに物語主題は、近世のヨーロッパではほぼ表現が定型化するものの、いくつかのパターンに分類できること、また中世における表現の変遷が重要であることが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、単なる図像分析ではなく、社会背景や当時のモラルに照らして考察を行ったことに意義がある。またきわめてプライベートな行為である入浴は、主に女性の表象が行われるが、そこに覗き見という他人、とくに男性の視線が存在しているということも重要である。また、女性を誘惑する者として悪とするミソジニー的な含意も、入浴主題に含まれることが判明した。

研究成果の概要(英文)：Taking into consideration the symbolic significance of water, this study paid attention to the ritualistic bathing, from an everyday act to a rite of passage, and analyzed iconographically the bathing figures represented in art, in particular. First, the history of bathing in Europe was reviewed, and then, focusing on the blood of Christ, or the Holy Blood, in Christianity, an analysis of the representation of bathing in the Holy Blood was conducted. Furthermore, we analyzed the story of "Diana" in ancient Greek mythology, which is well known as a subject of art, and the Christian stories of "Susanna's Bath" and "Bathsheba and David".

The results of the study revealed that, in particular, narrative themes can be classified into several patterns, although their expression became almost standardized in Europe in the early modern period, and that transition in expression during the medieval period and early printed books are important.

研究分野：版画史、北方美術史

キーワード：水 入浴 聖血 ディアナ アクタイオン カリスト スザンナ バトシェバ

研究に着手した背景

入浴というテーマに興味を持ったのは、「ゼーバルト・ベーハムの《若返りの泉》 - 大型木版画を読み解く愉しみ」を幸福輝編著『版画の写像学 デューラーからレンブラントへ』（ありな書房、2013年）に寄稿したことが契機であった。「若返りの泉」は世俗主題であるが、ヨーロッパ近世美術において、ギリシア・ローマ神話主題の「ディアナ」や、キリスト教主題の「スザンナの水浴」「バトシェバとダヴィデ」は、美しい女性のヌードを艶かしく表すものとしてよく知られている。それらを含みより広い視野で入浴というテーマを取り上げられないか、という考えからこの研究に着手した。また上述の物語ではなく、個人の入浴あるいは公共浴場の場面は15世紀末から16世紀にかけてのとくにドイツ語文化圏に多くみられるのはなぜか、という疑問もその背景にあった。さらに近年ドイツ語文献において、入浴にかんする出版が見られ、展覧会が行われているのは何故か、という疑問もあった。

研究の目的

水の象徴的な意義からすれば、入浴という日常的な行為が単に衛生的な面ではなく、通過儀礼として儀式的に用いられることもある。また、裸身を晒す入浴という行為には、覗き見が物語で重要な要素を持つ。入浴の多様な側面をヨーロッパ美術において、明らかにすることが目的である。

研究の方法

本研究の始まりの時期は新型コロナ禍にあり、所属機関からは海外出張が禁じられていた。したがって、文献の収集と読解に力をいれた。その中でU.Kiby, *Bäder und Badekultur in Orient und Okzident: Antike bis Spätbarock* (1995)は広くヨーロッパ並びに東方の入浴文化をまとめたものとして有用であった。また、日本語文献では、キャサリン・アシェンバーク「不潔の歴史」鎌田訳(2008)(原書 *The Dirt on Clean*, 2007)がよく網羅している。また、現地調査も行ったインスブルックのアムプラスに16世紀の城内の風呂の遺構として残る珍しい例である大公フェルディナントの妻フィリッピーネ・ヴェルザーの浴室についても、企画展カタログ *Splash! Das Bad der Philippine Welser* (2012)を入手した。一方日本の銭湯と古代ローマのテルマエを比較したヤマザキマリの漫画「テルマエ・ロマエ」は映画化もされブームとなったが、最近再び注目され、続編が出るとともに、古代ローマのテルマエと江戸時代の銭湯文化を比較した展覧会「テルマエ」も2023 - 2024年(山梨県立美術館他)に行われた。日本の入浴については文献が多々あり、本研究ではこれらは取り上げない。興味深いことに、S.Lorheit, *Wahreit, Lüge, Fiktion; Das Bad in der deutschsprachigen Literatur des 16. Jahrhunderts*(2008)や、D. Mentzel, *Bad und Akt: Studien zur Ikonologie von Badedarstellungen den Frühen Neuzeit*(未刊行博士論文)など、とくにドイツ語圏で入浴にかんする研究が進んでおり、こうした先行研究に基づきな

がら、研究を行った。また、現地調査としては、ローマ時代の風呂の遺構として世界遺産ともなっている Bath（ローマ人が来る前から温泉が湧くことで信仰を集めていた）や Kassel の風呂の博物館も訪れた。

研究の成果

当初は、近世ヨーロッパを軸として、その前後の図像を見ていくことを意図したが、ルネサンス期にほぼ定型の図像表現が現れるが、それらにはいくつかのパターンが見られるためそれを分析すると同時に、そこに至る中世写本あるいは初期ルネサンスの印刷本からの変遷が興味深いことが明らかになった。

キリストの聖血が泉となってそれを浴びたり、飲んだりする図像は、「憐みの泉」Fons pietatis といわれ、新約聖書にも記された「生命の泉」Fons vitae や「慈悲の泉」Fons misericordiae とも同一視されてキリストのメタファーとなった。儀式としてのキリスト教と水といえば、洗礼がすぐに思い浮かぶが、洗礼はユダヤ教から引き継いだものであり、ユダヤ教のそれは罪を清めるものであるのに対して、キリスト教では、イエスから与えられる死後の永遠の命となることが「ヨハネ伝」「黙示録」の記述に見て取れる。さらに、ユダヤ教にあっては旧約聖書に記されているように血を飲むことは禁忌とされた。一方キリスト教では、イエスが最後の晩餐において弟子にパンと葡萄酒を分け与え、「これは私の肉であり、私の血である」と言ったことに基づきミサとして定着していく。それはすなわち、葡萄酒 = キリストの聖血を飲むということである。

関連する図像として、「神秘の葡萄搾り器」がある。これは搾り器にイエスが挟まれその血が足元にたまるという図像である。たまった聖血は天使たちによって人々に分け与えられる。憐みの泉には悲しみの人や、磔刑、幼児キリストがともに描かれることがあり、それを飲んだり、浴びたりすることで死んだ人間の魂が清められる。この図像では、キリスト教図像でありながら、民間信仰である「若返りの泉」に近似した表現も現れている。

スザンナとバトシェバの物語は、若く美しい人妻の入浴が覗き見されることによって事件が起こるが、この二人の主人公の行動は全く正反対である。

スザンナの物語では、二人の長老が一人でいるところを襲い、関係を迫る。それを拒否した彼女は長老たちの嘘の証言のために死刑を言い渡されるが、そこに神の力を得たダニエルが嘘を見抜き、代りに長老たちが石打の刑に処せられる。貞節の美德が卑しい嘘に勝利する。スザンナの図像は初期キリスト教時代からみられるが、入浴の場面として描かれたのは、9 世紀後半にローマのギリシア修道院で制作された『サクラ・パラレツラ』であり、図像的には古代の化粧するウェヌスが手本となっている。しかしこれは例外的な作例で、中世においては着衣であらわされるのが普通である。妻の貞節という美德はルネサンス期において、カトリックとルター派では女性の地位が異なっていたにも関わらず、最上のものとされた。それは根本的に家長夫制が支配していたことを示している。図像的には、中世においては二人の長老は暗示的に示されることが多いが、ルネサンス期になるとスザ

ソナの裸身の美しさが強調されると同時に、だんだんと暴力的になり、レイプそのものに見紛うようになる。

バトシェバは夫の留守にその入浴をダヴィデ王に見初められて、王の子供を身ごもる。王はそれを誤魔化そうとして夫ウリヤを戦場から連れ戻すが、ウリヤが家に帰らないので、上官に最前線で置き去りにする命令を本人に持たせた。ウリヤが戦死して未亡人となるとダヴィデは7人目の妻としてバトシェバを迎える。ダヴィデの罪は預言者ナタンに諭されて王は自らの罪を反省するが、二人の間の子供は死ぬ。しかし、ダヴィデが年老いて後継者を決めるときナタンの助言で、次に生まれたソロモンが王位に就く。バトシェバは王の母となり、崇められる。

ここでのバトシェバは徹底的に自己主張のない受け身の女性である。王の命令には逆らえないにせよ、ここで実際行われたのは姦淫である。しかし中世においては、ダヴィデの罪が贖罪によって神から救われることを説くものがある一方で、4世紀のミラノのアンブロシウスによる『ダヴィデの弁明』では、ダヴィデとバトシェバの合一はキリストと教会の結婚とされ、ウリヤの方がその名前から悪魔とされた。また、バトシェバの水浴は洗礼であるともされた。14世紀のパリでおそらくピュッセル工房で制作された『道徳聖書』では、バトシェバのもとにやってきた王の使いと、彼女との間に悪魔が飛翔し、悪女としてのバトシェバが描かれている。初めてバトシェバの水浴場面が描かれるのは、先のスザンナの例で挙げた『サクラ・パラレラ』であるが、中世においてもダヴィデの覗き見、床を共にする二人は描かれている。15世紀末のフランス写本では、懺悔詩編のはじまり「主よ、怒ってわたしを責めないでください」のところにこの場面が描かれる。そこで描かれるのは全裸にせよ、スカートを腿までたくし上げた姿にせよ、男を誘惑するバトシェバである。ルーカス・クラナハ(父)が描いた作品はスカートをひざ下まで下ろしており、クラナハ(子)が「女の力」のシリーズとして描いたと考えられる作品では膝を見せている点が、両者とも着衣であるとはいえ、大きな相違点であろう。レンブラントによる物思いに沈むバトシェバはむしろ例外的で、美しいバトシェバは、賢明な王ダヴィデを惑わす悪女に位置づけられる。

ルネサンス以降の図像を、スザンナでは8パターンに、バトシェバでは7パターンに分類して分析した。

さて最後にディアナ(アルテミス)の図像を見ていくことにする。狩りの女神で処女神であるアルテミスが狩りを終えてニンフたちと水浴をしているところに、アクタイオンが迷い込み女神の裸身を見てしまう。女神は怒って呪いの言葉を発し、するとアクタイオンは鹿に変身し自身の犬たちにかみ殺されてしまう。ここでも意図的ではないにせよ覗き見という要素が重要である。古代においては、アルテミスは着衣で、犬に襲われるアクタイオンにとどめの一矢を向けている。その後水浴のアルテミスも表現され、それはヘレニズム詩人のカリマコスが書いた「パラスの水浴」から影響を受けたものと考えられている。

ルネサンス以降の出典としては、オウィディウスの『変身物語』あげられる。しかし中

世写本のオウィデウス本にはわずかな挿絵しか付されていない。それに対して最初の女性職業文筆家であったクリスティーヌ・ド・ピザン（1364 - 1430）の『オテアの書簡』は広く読まれ、挿絵が施されていた。これは、彼女の空想上の女神オテアがトロイアの英雄である 15 歳のヘクトールへ宛てた手紙であり、その形式は序に続き、古代神を描写する詩のテキスト、道徳的注釈、寓意すなわちキリスト教的解釈の 3 部で構成されている。「アクタイオン」の項目では、鹿に変えられたアクタイオンは、罪を犯した罰を受け、それによって悔い改められたとされる。この項目に付された挿絵ではアクタイオンは変身しておらず、犬にも襲われていない。

オウィデウスの印刷本が最初に出されたのは、1484 年のブリュージュのコラルト・マンシオンによる『寓意オウィデウス』であるが、これとほぼ同じ内容でより豪華になりパリのアントワーヌ・ヴェラルの『詩的聖書』のいずれもこれを木版挿絵にはしていない。

より重要なのは、ヴェネツィアで 1497 年にジョヴァンニ・ロッソが出版したジョヴァンニ・デイ・ボンシニョーリによるイタリア語訳である。後世に大きな影響を与えたこの書籍は、アクタイオンは 1 画面に 2 場面が表されており、片側に森の中の泉にディアナとニンフがおり、アクタイオンに水をかけようとしている。アクタイオンはまだ変身していない。その一方で鹿になったアクタイオンを襲う犬たちと彼を探す獵仲間たちが表されている。すでにこの印刷本の中で、物語の主要素が出てきている。ディアナによって呪いの言葉とともに水をかけられるアクタイオン、そのため彼は一部あるいは全身が鹿に変身している。そして、両県に襲われて死ぬアクタイオンである。アクタイオンを変身していない姿で描いた画家にティツィアーノがいるが、この「ポエジア」連作の中の 1 点では禁断を犯した彼の動揺が見て取れる。同じくヨルダーンズによる作品では、恐怖はニンフたちの方に見られ、アクタイオンは堂々と歩いている。

同じく『変身物語』に記されるディアナとカリストの物語は、ディアナに変身したユピテルの子を宿したニンフのカリストが、女神との水浴で妊娠が暴かれ追放され、女神のもとを去るとユノが復讐にやってきてカリストを熊に変える。その熊を長じた息子のアクロスが射ようとするのを、ユピテルが制して二人を天上の星座に変えるというものである。この物語はロッソ版に 1 画面に 3 場面が描かれている。そこでは、ディアナ（実はユピテル）とカリストが木陰で抱き合う姿と、ニンフたちに囲まれ、妊娠が発覚する場面が描かれ、追放されたカリストがユノに復讐され髪をつかまれているところが描かれている。ティツィアーノは先のシリーズで妊娠の発覚を描き、この表現は広く知られていたようである。レンブラントは、大人数のニンフを連れたディアナの水浴を描いたが、ここでは「ディアナとアクタイオン」と「カリストの妊娠の発覚」が同一画面に描かれており、他に例がない。

アクタイオンが文学や演劇でも多様に解釈されたに対して、カリストの物語にはそれがない。この場面にしばしば添えられる「(妊娠の)発覚」という言葉はカリストの罪を強調している。ギリシア・ローマ神話に通底する家父長制が垣間見られる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 保井亜弓	4. 巻 67
2. 論文標題 西洋入浴図考（下）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 金沢美術工芸大学紀要	6. 最初と最後の頁 57-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 保井亜弓	4. 巻 66
2. 論文標題 西洋入浴図考（中）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 金沢美術工芸大学紀要	6. 最初と最後の頁 139-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 保井亜弓	4. 巻 65
2. 論文標題 西洋入浴考（上）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金沢美術工芸大学紀要	6. 最初と最後の頁 31、40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 保井亜弓	4. 巻 38
2. 論文標題 アダム・バルチャー版画史家として、あるいは版画家としてー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化	6. 最初と最後の頁 108、125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 保井亜弓
2. 発表標題 アダム・バルチャー 版画史家として、あるいは版画家としてー
3. 学会等名 「歴史の中の美術 最終講義に代えての小講演集」（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------